慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	不均衡の経済表に就て：ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの経済表』を中心として
Sub Title	Tableau economique in disequilibrium concerning mainly "The tableau economique of François Quesnay" by Dr. H. Woog
Author	渡邊, 建
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.8 (1958. 8) ,p.711(57)- 731(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19580801-0057
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580801-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山伊知郎編　東洋経済）第一部第11章―
(6) 尾崎巌「所得―余暇選好場の測定(一)」―三田学会雑誌五一巻七号―
(7) 佐々木孝男、孫田良平「産業別規模別賃金格差」―賃金基本調査（前掲）第9章―
(8) 佐々木孝男「労働力率の変動について」我国完全雇用の意義と対策（昭和同人会編）第二部I―
(9) 辻村江太郎「クロス・セクション消費線の非直線性と習慣仮説」三田学会雑誌第50巻第9号
(10) 〃「賃金の形態と産業内賃金分布」―賃金基本調査（前編）第11章―

(11) 〃「労働供給曲線についての覚え書」三田学会雑誌第49巻第10号
(12) 小尾恵一郎「労働市場の分析」―生活水準研究資料(9)「就業に関する研究」第二章（統計研究会）―
(13) 〃「労働供給函数の計測」―生活水準研究資料(10)「就業に関する研究(二)」（統計研究会）第一章―
(14) 〃「実物給与の機能について」―「賃金基本調査」（前掲）第10章―
(15) 〃「労働供給について―経験的事実と理論の再考―」―経済研究（岩波）第8巻3号―

不均衡の経済表に就て

――ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの経済表』を中心として――

渡邊　建

一

ウーグ博士 Henri Woog は一九五〇年の『フランソワ・ケネーの経済表――そのメカニズムの解説並びにマルクス、ビリモヴィッチ及びオンケンの解釈に関する一批判』The Tableau Economique of François Quesnay. —An Essay in the Explanation of its Mechanism and a Critical Review of the Interpretations of Marx, Bilimovic and Oncken. に、その第一篇の序論、第二篇の「均衡の経済表」に次ぐ、第三篇「不均衡の経済表」に於て、ミラボー侯の『経済表と其解説』Tableau Economique avec ses explications の支出不均衡の諸経済表を紹介し解説している。

一七七三年の冬、巴里のミラボー侯邸に催された重農経済学派の不均衡の経済表に就て同年度の最後の会合で行われたデュポン Dupont de Nemours の講演に拠れば、ケネーは一貴夫人――オンケン Auguest Oncken の推測によれば寵妃ポンパドゥル侯爵夫人、後のシェル Gustave Schelle の研究にては常に、その会食の主人席に着いたド・パイユ夫人 Mme de Pailly――の勧告に従って、最初、官報『フランスの使徒』Le Mercure de France に経済表を掲載せんとせるを断念して、一七五七年の七月中の或る一夜、説得せし以来、彼の最初の、又最も熱心なる門弟となったミラボー侯の『人間の友』の才筆によって、社会に紹介せんとし、先ず一七五九年の春、増補訂正せる、その第二版の三部の中の一部を、ベルンの経済協会 Ökonomische Gesellschaft in Bern に提出するミラボー侯の論文に添附すべく贈ったのである。このベルンの農業協会に提出せる論稿を『人間の友』第五部として刊行せるミラボー侯は自ら経済表の解説を試み、一七五九年『人間の友』第六部と同時にその続篇 Suite de la

sixième partie de l'Ami des hommes として『経済表の第二の説明』la seconde explication du Tableau économique を公刊せんとしたが、それは更に翌一七六〇年に『人間の友』第七篇として『経済表と其解説』と題して出版せられたのである。これは一七六六年には英国に於て "The Economical Table, on attempt towards ascertaining and exhibiting the source, progress, and employment of riches, with explanations by the Friend of Mankind, the Celebrated Marquis de Mirabeau, translated from French" と題する英訳まで現われることとなったが、クレール Clerc はその著『禹大帝と孔子』Yu, le grand et Confucius, Soisson, 1767 に於て「英国人がこの著書の訳者に一千ギーネの賞金を贈呈したと聞いても、予は少しも之を怪しむものではない」(ibid., pp. XIV-XV) と誌している。

ミラボー侯は、その『経済表と其解説』の前篇にて「均衡の基本的支出秩序」の経済表の解説を行い後篇にて、変調 dérangemens の経済表を発表しているが、その七つの誘因を掲げ、その第一の誘因、農業の資金の「私的掠奪」déprédations privées に帰因するものと第二以下の六項目の誘因「公的掠奪」déprédations publiques によりて惹起せられるものとに大別しているが、次に掲げる如く、ウーグ博士は解釈の便宜のために、これを「経済循環全般より生ずる不均衡の誘因」と「農業の生産面より生ずる不均衡の誘因」とに区分して検討している。

「不均衡の経済表」の七つの誘因

- 均衡攪乱の誘因
  - 農業資金の「私的掠奪」
    - 第一の誘因—国民の私的濫費—第三表
    - 第二の誘因—農業投資の掠奪—第四表
  - 農業資金の「公的掠奪」
    - 第三の誘因—耕作及び人口の衰微
    - 第四の誘因—金銭に関するもの
    - 第五の誘因—行政に関するもの
    - 第六の誘因—商業に関するもの
    - 第七の誘因—破壊的課税に関するもの 第六表
    - 第五表
  - 循環面より生ずる不均衡の誘因
  - 農業の生産面より生ずる不均衡の誘因

二

ウーグ博士が「不均衡の経済表」の解説に於て第一に取り上げたのは、ミラボー侯が経済循環の全般から生ずる不均衡の誘因として国民の習性或は無智から生ずる濫費「過度の装飾の奢侈」の結果を表式する、その『経済表と其解説』の第三の経済表である。

第一 農業と商工業との差異に就て

ケネーは既に『大百科全書』の「小作人」Fermiers や『穀物』Grains 等に於て「仏蘭西に於て、本質的にして而も、最も知られていないか、少くも最も無視されてゐる問題」として「人間の仕事に於て手間賃しか支払はれぬ労働の生産物と、それを支払った上に、なほ収入を得る労働の生産物との相違すらも認められなかった。斯る不注意のために、農業より工業が選ばれ、農産物の商業より、工業の製作品の商業が選ばれたのである。斯くてまた、更に進んで、土地の耕作を害してまでも、奢侈品の製造業とその商業とが庇護されさへしたのである。」(Œuvres, p. 207: 邦訳『全集』第二巻六八頁、坂田訳『諸論稿』一六一頁) ことを指摘し、その「放逸なる奢侈によって維持される製造業とその商業とは大都市に人と富とを集め、土地の改良を妨げ、農村を荒廃せしめ、農業に対する軽侮の念を吹き込み、過度に個々の人の支出をふやし、家族の維持を困難ならしめ、人間の増殖を阻み、ひいては国家を疲弊させる。斯くして国家の衰頽は屢々斯る商業の繁栄にすぐ続いて起った」(Œuvres, p. 189: 邦訳『全集』第二巻四一頁、坂田訳『諸論稿』一二七—八頁) のであると述べている。

本来、仏蘭西の商業の主なる対象は、穀物・葡萄酒・火酒・塩・大麻・羊毛及び家畜の供する其の他の農産物と、大麻・亜麻・羊毛等を材料とし、従って、これ等農産物の価値を増大する麻布、其の他の大衆向きの織物であった。然るに、仏蘭西国民は久しき以前より、その原料に適する絹糸も、羊毛も産することのない奢侈品の製造に熱中し、而もこの不練の製造業に於て、外国と競争し得んがために、その工賃を低下すべく小麦の価格を引下げたのである (Œuvres, p. 193: 邦訳『全集』第二巻四六頁、坂田訳『諸論稿』一三六頁参照)。故にケネーは論稿『人間』Hommes にコルベェル Jean Baptiste Colbert が一六六一年に奢侈品工業を創設するために採った政策は十ヵ年間穀物価格を低下するの結果となり、国家の真の富の根源たる農村は疲弊し、王国の収入はその犠牲となれることを指摘している (Revue D'histoire des Doctrines économiques et sociales, No. 1, 1908, p. 53: 邦訳、坂田訳『諸論稿』二九六頁参照) のである。

洵に、仏蘭西は精巧な織物を製造し、販売することによりて数百万を利得するために、土地の農産物数十億を喪失したのであった。而も、金銀の織物を着飾った国民は股賑なる商業を享有して居ると思いこんでいたのであった (Œuvres, p. 194: 邦訳『全集』第二

巻四七頁、坂田訳『諸論稿』一三七頁参照)。ケネーはまた『統治の箴言』の註解の中に「前世紀のさる大臣が、オランダ人の貿易と奢侈品製造業の絢爛さに眩惑せられ……指先の労働から富を生じさせようとし、富の源泉そのものを傷つけたばかりか、農業国民の経済的組織の一切を混乱に陥れた。」と述べ「嗚呼！　不幸にも斯る一般的無秩序の諸原因が、余りにも長い間知られずにいた、そこから不幸が襲来した」(Œuvres, p. 343-4: 邦訳『全集』第三巻二六頁、『経済表』岩波文庫本一〇〇―二頁、坂田訳本一八七―九頁)のであると嘆じている。

仏蘭西の重商主義たるコルベエル主義政策に対する批判から生じたケネー及び其の他の重農主義学徒の経済理論の基盤をなす農業純収益論は、簡明に次ぎの「装飾の奢侈」の処論に示めされているのである。

経済表初版と同じ一七五八年にミラボー侯の『人間の友』第四篇の中に採録されたケネーがド・マリヴェール De Marivelt と共に提起せる『科学院並びに他の地方の学会に提出せる人口・農業及び商業に就ての重要なる質問』Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce, proposées aux Académies et autres sociétés savantes des provinces に於て既に「有用な奢侈」と「有害な奢侈」とあることを明らかにし、「奢侈品製造業の強引な発展に伴って普及された装飾の奢侈は市民の各階級間に於ける程よい且つ有用な支出の秩序を乱すことによって有害な奢侈となったのではないだろうか。」(Œuvres, p. 302: 邦訳『全集』第二巻二二二頁、坂田訳『経済表』三六四頁)と述べているが、ケネーは経済表第二版の『説明』に於て支出をなすものが社会に有用な「食料の奢侈」または有害の「装飾の奢侈」に耽る程度の大小に応じ、「不生産的支出または生産的支出の孰れか一方が他方にまさる程度の大小により収入の年再生産に生ずる変化は……表の秩序に生じる変化そのものによって容易にそれを判断することができる。何となれば「装飾の奢侈」が地主にあって、六分ノ一、工匠において六分ノ一、耕作者において六分ノ一増加するものと仮定すれば六百リーヴルの収入の再生産は五百リーヴルに減少する。若し之と反対に支出の増加が自国産農産物の消費に於て、又はその輸出に於て、同じ程度に達したとすれば、六百リーヴルの収入の再生産は七百リーヴルに、かくて累進的に上昇するであろう。これによって見れば、「装飾の奢侈」が過度なるときは、富裕の国民を極めて迅速に、華やかさのうちに、破滅させうることが了解される。」(Tableau Économique, p. ii: 邦訳『経済表』岩波文庫本一九頁、坂田訳本二六頁、傍点筆者)と述べ、農業国の衰頽を激化せしめる主要なる八つの原因の第三に「装飾の奢侈が過度なること」(ibid., p. xi: 邦訳『経済表』岩波文庫本三二頁、坂田訳本三八頁)を挙げているのである。

然しながら斯く過度の「装飾の奢侈」によりて地主の所得の再生

産が六百リーヴルより五百リーヴルに減少し、又過度の「食料の奢侈」によりて、それが六百リーヴルより七百リーヴルに増大することを経済表に表示せず、又その計算をも明らかにすることがなかった。従って、ミラボー侯はその『経済表と其解説』の第三表にこの「装飾の奢侈」の支出秩序を表式し、計算により、二つの場合の結果を明らかにしたのである。経済表第二版の『説明』のこの二つの「奢侈」に就ての解釈は、後述する如く、従来、諸学者の間に意見の差異があり、而も亦、それを解説せるものと考えられるミラボー侯の「装飾の奢侈」の経済表に、何人も言及することがなかったのであるが、ウーグ博士はこれを採り上げたのである。

三

ミラボー侯の『経済表と其解説』の前提とする仏蘭西の農業の再建状態はケネーが経済表の第二・三版に仮定するところであり、少なくとも、其の領土の三分ノ一に当る耕作地四千万アルパンに大規模耕作が行われ、其の他の葡萄園・森林・秣場等が良く経営せられて、小作料六億リーヴルに、租税三億リーヴル、十分ノ一税一億五千万リーヴルを含めて、地主階級の所得総額が十億五千万リーヴルと計算し得る状態であり、従って、その挿入する経済表の第一表は地主の一戸平均の純所得六百リーヴルを諸支出の基本とし、その第二表は、それに租税・十分ノ一税を含めて一戸平均の所得一千五十リーヴルを諸支出の基本とする。而も、それは耕地百二十アルパンを年々耕作する馬の犁一挺の純収益の二分ノ一に等しきものであるから、この経済表も亦馬の犁半挺を基本とすると称せられたのである(拙稿「経済表の生成発展」―三田学会雑誌第三十八巻第二号六一―五頁参照)。

第二「装飾の奢侈」の支出並びにその結果に就て

ミラボー侯の『経済表と其解説』の第一、第二の経済表はいずれも、年々同額の地主階級の所得が再生産せられる均衡の基本的支出秩序を表示するものであるが、次の第三の経済表は、その第二表と

第一図

ミラボー侯『解説』の「装飾の奢侈」

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	年投資
1050	1050	525
農産物	純収穫	製作品
437－10	437－10	612－10
255－ 4－2	255－ 4－2	255－ 4－2
106－ 6－8	106－ 6－8	148－17－5
62－ 0－7	62－ 0－7	62－ 0－7
25－17－0	25－17－0	36－ 3－8
15－ 1－7	15－ 1－7	15－ 1－7
6－ 5－8	6－ 5－8	8－15－11
3－13－3	3－13－3	3－13－ 3
1－10－6	1－10－6	2－ 2－ 8
0－17－9	0－17－9	0－17－ 9
0－ 7－4	0－ 7－4	0－10－ 4
0－ 4－3	0－ 4－3	0－ 4－ 3
0－ 1－9	0－ 1－9	0－ 2－ 5

同額の租税・十分ノ一税を含む地主階級の一戸平均の所得一千五十リーヴルを諸支出の基本とするが、人々の過度の「装飾の奢侈」の生活により、製作品購入のために不生産階級への支出が、食料購入のために生産階級へ支出せられるよりも六分ノ一ずつ多額となるものとする。（本稿第一図参照、尚『経済表と其解説』第三表は不生産階級の年投資を、その第一表と同額の三百リーヴルとするが、これはその第二表と同額の五百二十五リーヴルとすべきものと思われるので訂正して記載する。）

斯くてウーグ博士はこの「装飾の奢侈」の経済表に基づき地主階級の所得一千五十リーヴルは

$$\begin{cases}\text{生産階級へ四三七リーヴル一〇ソル}\left(525-\frac{1}{6}\cdot 525\right)\\ \text{不生産階級へ六一二リーヴル一〇ソル}\left(525+\frac{1}{6}\cdot 525\right)\end{cases}$$

を支出し、又斯かる地主階級の生活習性は直ちに、他のすべての階級に反映し、社会全般に普及されるから、生産階級のものは農産物売却代金として受け取る四百三十七リーヴル十ソルを

$$\begin{cases}\text{生産階級へ一八二リーヴル五ソル一〇ドニエ}\left(218-15-\frac{1}{6}\cdot 218-15\right)\\ \text{不生産階級へ二五五リーヴル四ソル二ドニエ}\left(218-15+\frac{1}{6}\cdot 218-15\right)\end{cases}$$

を支出し、又不生産階級のものは製作品の売却代金として受け取る六百十二リーヴル十ソルを

$$\begin{cases}\text{生産階級へ二五五リーヴル四ソル二ドニエ}\left(306-5-\frac{1}{6}\cdot 306-5\right)\\ \text{不生産階級へ三五七リーヴル五ソル一〇ドニエ}\left(306-5+\frac{1}{6}\cdot 306-5\right)\end{cases}$$

を支出する。（ウーグ博士の掲載する経済表がこの支出を二百五十四リーヴル四ソル二ドニエ、又次の支出一百六リーヴル六ソル八ドニエを一百五リーヴル六ソル八ドニエとするは『人間の友』の一版本の誤った数字をそのまま引用せるためである。）(ibid., p. 85)

これは過度の「装飾の奢侈」の生活のために、各階級のものが、「各支出額」の二分ノ一よりも、その六分ノ一多くを製作品購入のため不生産階級へ支出し、従って生産階級への支出は、その「各支出額」の二分ノ一よりも、その六分ノ一少なくなるとウーグ博士は解説している。従って筆者は各階級の不生産階級への支出はその「各支出額」の十二分ノ七となり、生産階級への支出は、その十二分ノ五となり、その両支出の差が六分ノ一となることであるとする。

先ず、諸支出の基本となる地主階級の所得をaとし、生産階級への支出の率をR、不生産階級への支出率をrとして、一般公式化せる経済表（原表）を本稿第二図として掲載することとする。

この公式に於て生産階級の地主・不生産両階級への食料としての農産物売却代金の総額は――即ち当該年度の年投資額は――従ってそれによって再生産せられる経済表（原表）の中央の純収穫額、即ち、次年度の地主階級の所得額は

$$S=\frac{aR(1+r)}{1-Rr}$$

となり、

又不生産階級の地主・生産両階級への製作品売却代金の総額は

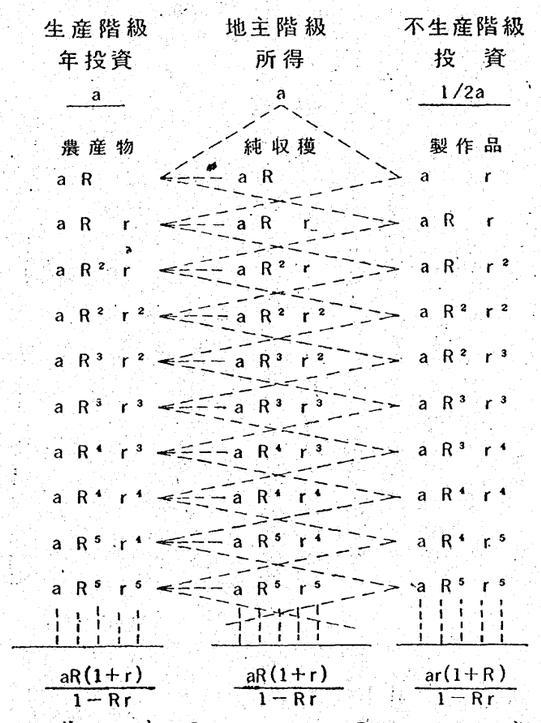
$$S'=\frac{ar(1+R)}{1-Rr}$$

となる。

このミラボー侯の『経済表と其解説』第三表（本稿第一図）にては$a=1050$, $R=\frac{5}{12}$, $r=\frac{7}{12}$であるから、生産階級の地主・不生産年階級へ食料として売却せる農産物の売却代金額、従って又それを両投資として再生産せられる純収穫、斯くてその売却による純収益

第二図

公式化せる経済表（原表）



によって納められる地主階級の所得総額は

$$S=\frac{aR(1+r)}{1-Rr}=915\frac{15}{109}$$

となり、

その時、不生産階級が地主・生産両階級へ売却する製作品の代金総額は

$$S'=\frac{ar(1+R)}{1-Rr}=1146\frac{36}{109}$$

となる。

この本稿の第一、第二図の経済表（原表）のジッグザッグの支出過程を総括して『農業哲学』の略表の形式にて表示すれば次の第三図となる。

斯くして、過度の「装飾の奢侈」の結果、生産階級が、地主・不生産両階級へ食料として売却し得た農産物は九百十五リーヴルに止まり、従って、この売却代金を年投資として再生産せらるる純収穫は九百十五リーヴルに減少し、斯くて地主階級の所得は一千五十リーヴルより、九百十五リーヴルに百三十五リーヴル、即ち約六分ノ一（計算にては七十分ノ九）に減少することになる。

この第三の経済表の下の註に基づき生産階級の投資と収益とをその第二表の均衡の基本的支出秩序の場合とこの「装飾の奢侈」の時とを比較すれば次表（本稿第一表）の如くなりて、再生産総額は、基本的支出秩序の二千七百五リーヴルより二千三百五十七リーヴルと三百四十八リーヴル減少することとなる。斯くてミラボー侯はこ

れを約十五分ノ二減ずるものとする。但し、表の下の註では五分ノ二とするが（L'Ami des Hommes, t. VII, p. 87）、これに就て

第三図

公式化せる経済表の略表

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	投資
a	a	$1/2a$
aR	aR	ar
$\frac{aRr(1+R)}{1-Rr}$	$\frac{aRr(1+R)}{1-Rr}$	$\frac{aRr(1+r)}{1-Rr}$
$\frac{aR(1+r)}{1-Rr}$	$\frac{aR(1+r)}{1-Rr}$	$\frac{ar(1+R)}{1-Rr}$

ミラボー侯『解説』の「装飾の奢侈」の略表

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	投資
1050	1050	525
437－10	437－10	612－10
477－10	477－10	533－10
915	915	1146
$(915\frac{15}{109})$	$(915\frac{15}{109})$	$(1146\frac{36}{109})$

久保田博士は『ケネー研究』一六三頁註（一二）に「総再生産の差は（1050＋1655）－（915＋1442）＝348で、損失の割合は先の記述の様に約十五分ノ二になる。」尚その攪乱された場合の経済表の下欄に「損失は三四八リーヴルではほぼ五分ノ二である」とあるのは誤記で、同書本文の様に十五分ノ二というのが正しいと注意される。尚再生産総額も純収益も共に均衡の場合よりも、いずれも約十三パーセントの減額となる。

第一表

投資と収益	均衡の場合	装飾の奢侈	均衡との差額
原投資	五〇〇〇	四三六〇	六四〇
年投資	一〇五〇	九一五	一三五
年支出 投資利子	六〇五	五二七	七八
年支出 原投資利子	五〇〇	四三六	六四
年支出 年投資利子	一〇五	九一	一四
年支出	一六五五	一四四二	二一三
総収益	二七〇五	二三五七	三四八
総収益 年支出回収	一六五五	一四四二	二一三
総収益 純収益	一〇五〇	九一五	一三五

四

第三「食料の奢侈」の支出並びにその結果に就て

ミラボー侯の『経済表と其解説』にありては、この「装飾の奢侈」の対蹠的支出傾向である「生活資料の奢侈」luxe de subsistence又はfaste de subsistenceを経済表にて示さずして、その結果として、生産階級の再生産額を計算して、二千九百五十二リーヴルとなり二百四十七リーヴル、約十分ノ一増加するものとする（Ami des Hommes, t. VII, p. 87：本稿第二表参照）。

第四図　食料の奢侈（1）

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	投資
1050	1050	525
612－10	612－10	437－10
533－10	533－10	477－10
1146	1146	915
$(1146\frac{36}{109})$	$(1146\frac{36}{109})$	$(915\frac{15}{109})$

㈠　「食料の奢侈」初年度の支出とその結果に就て

ウーグ博士はこの自国産の「食料の奢侈」の支出状態を表示する経済表を掲げて、この「積極的」不均衡の表 Tableau in (positive) disequilibrium に於ける不生産階級への支出の減額をその第三段階まで記入している（ibid., p. 87）。

今、前記公式（本稿第二図）に基づき、この「食料の奢侈」の支出の結果を算出して、略表の形式にて表式すれば第四図となる。

その時、生産階級の投資と収益とを支出均衡の基本的秩序の場合と比較すれば本稿第二表の如く算定され、その再生産総額は二千七百五リーヴルより二千九百五十二リーヴルに、二百四十七リーヴル増額する。これを前述の如くミラボー侯は約十分ノ一増加すると記しているが、久保田博士は、この場合、純収益に於ては一千五十リーヴルより一千百四十六リーヴルに、九十六リーヴル「約九％の増加率を示している」（『ケネー研究』一六九頁）とせられるが、再生産総額に就ても、同じく九パーセントの増加をなすものとする方が計算上は一層正確であると考えられる。

その『経済表と其解説』に於ては「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」と対比せしめて、その影響を検討するに止めているが、後の『農業哲学』第十章「諸支出と工業との関係」に於ては経済表の略表を使用して、先ず「装飾の奢侈」二ヵ年間の影響を算定し（Philosophie rurale, pp. 308-9：t. III, pp. 36-9）又「装飾の奢侈」一ヵ年間に衰微せる農業が「食料の奢侈」二ヵ年間に、如何に急速に回復せらるるかを明らかにしている（ibid., pp. 314-5：t. III, pp. 50-1）。但し、この場合、計算の方法には『解説』の場合とは若干の差異があることは認められる。

第五図　食料の奢侈（2）

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	投資
1146	1146	573
668－10	668－10	477－10
582－10	582－10	520－10
1251	1251	998
$(1251\frac{15}{109})$	$(1251\frac{15}{109})$	$(998\frac{88}{109})$

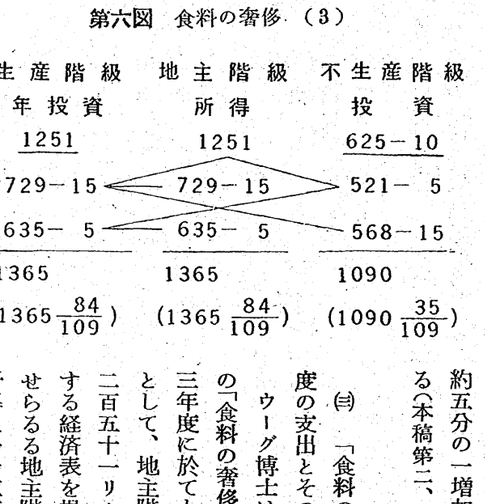
㈡　「食料の奢侈」次年度の支出とその結果に就て

ウーグ博士はミラボー侯の『解説』の計算方法に従い同程度の「食料の奢侈」が更に次年度も継続するものとする経済表を掲げて、再生産せられる地主の所得額が一千二百五十一リーヴルとなるものとする（ibid., p. 88）。

この場合、本稿第二図の公式にて一ヵ年間の各階級の支出総額を算出し、それを略表の形式にて表示すれば第五図となる。

又、その時、生産階級の投資と収益とを算定して、支出均衡の基本的秩序の場合と比較すれば、その再生産総額は三千二百二十三リーヴルとなりて、五百十八リーヴル増加し、その純収益は一千二百五十一リーヴルとなりて三百一リーヴル増大し、再生産総額も、純収益も、何れも前年度より更に約九パーセント増加し、均衡の場合よりも約五分の一増加することとなる（本稿第二、第三表参照）。

第六図　食料の奢侈（3）



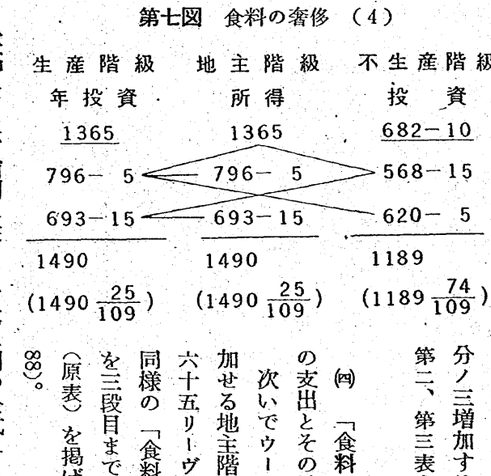
㈢　「食料の奢侈」第三年度の支出とその結果に就て

ウーグ博士は更に同一程度の「食料の奢侈」の支出が次の三年度に於ても行われるものとして、地主階級の所得一千二百五十一リーヴルを基本とする経済表を掲げて、再生産せらるる地主階級の次年度の所得は一千三百六十五リーヴルとなるものとする（ibid., p. 88）。

この場合も、前例の如く本稿第二図の公式から一ヵ年間の各階級の支出総額を算出し、それを略表の形式にて表示すれば第六図となる。

又その時の、生産階級の投資と収益とを均衡の基本的支出秩序の場合と比較すれば本稿第二表の如く算定され、その再生産総額は三千五百十六リーヴルとなりて、八百十一リーヴル増加し、その純収益は一千三百六十五リーヴルとなりて、三百十五リーヴル増大する。再生産総額も純収益額も、何れも前年度より更に約九パーセント増加し、支出均衡の場合よりも約十分ノ三増加するのである（本稿第二、第三表参照）。

第七図　食料の奢侈（4）



㈣　「食料の奢侈」第四年度の支出とその結果に就て

次いでウーグ博士は斯くて増加せる地主階級の所得一千三百六十五リーヴルを基本として、同様の「食料の奢侈」の支出を三段目まで表示する経済表（原表）を掲げている（ibid., p. 88）。

本稿にては、前例に従いて、第二図の公式によりて、この「食料の奢侈」四年度の各階級の支出総額を算出し、それを略表の形式にて表示する第七図を掲載することとする。

この場合の、生産階級の投資と収益とを均衡の基本的支出秩序の時と比較すれば本稿第二表の如く、その再生産総額は三千八百三十九リーヴルと算定されて、一千百三十四リーヴル増加し、その純収益は一千四百九十リーヴルとなりて四百四十リーヴル増大する。斯くして、再生産総額も、純収益も、いずれも、前年度より更に約九パーセント増加し、均衡の場合よりも、約五分ノ二増大することとなる（本稿第二、第三表参照）。

㈤　「食料の奢侈」四ヵ年間の生産階級の投資と収益に就て

第二表

投資と収益	均衡の場合	食料の奢侈				出支年				総収益	
		一年	二年	三年	四年	年投資	利子		年支出	総収益	年支出回収	純収益
							投資利子	利子				
								原投資				
								年投資				
原投資	五〇〇〇	五四六〇	五九六〇	六五〇〇	七一〇〇	一〇五〇	六〇五	五〇〇	一六五五	二七〇五	一六五五	一〇五〇
年投資	一〇五〇	一一四六	一二五一	一三六五	一四九〇	一〇五	六六〇	五四六	一八〇六	二九五二	一八〇六	一一四六
年支出	一六五五	一八〇六	一九七二	二一五一	二三四九	一〇五	七二一	五九六	一九七二	三二二三	一九七二	一二五一
総収益	二七〇五	二九五二	三二二三	三五一六	三八三九	一一四	一二五	五四六	二一五一	三五一六	二一五一	一三六五
年支出回収	一六五五	一八〇六	一九七二	二一五一	二三四九	一四九	七八六	六五〇	二三四九	一四九	二三四九	一四九〇
純収益	一〇五〇	一一四六	一二五一	一三六五	一四九〇	一〇五	六〇五	五〇〇	一六五五	二七〇五	一六五五	一〇五〇

㈥　「食料の奢侈」四ヵ年間に増額する生産階級の再生産額と純収益額に就て

第三表

食料の奢侈	再生産総額の増加額	純収益の増加額
第一年度	247（2705×1/10＝2705）	96（1050×1/10＝105）
第二年度	518（2705×1/5＝541）	201（1050×1/5＝210）
第三年度	811（2705×3/10＝811）	315（1050×3/10＝315）
第四年度	1134（2705×2/5＝1082）	440（1050×2/5＝420）
四年間の合計	2710（2705×1＝2705）	1052（1050×1＝1050）

斯くて「食料の奢侈」四ヵ年間に増加せる生産階級の再生産総額は二千七百十リーヴル、純収益額は一千五十二リーヴルとなるが、これは、ケネーが経済表第二・三版に、又ミラボー侯が『経済表と其解説』に、その表の基準とする馬の犁半挺の再生産額やその純収益額と等しく、従って、この増加の結果いずれも二倍即ちその一挺分となるのである。

㈦　「食料の奢侈」四ヵ年間に於ける地主・生産両階級の不生産階級への支出額に就て

地主・生産両階級の不生産階級への支出額は本稿第四表の如く「食料の奢侈」の支出でありながら、その第三年度より支出均衡の時よりも多額となる。但し、ウーグ博士は「食料の奢侈」第三年度の経済表に於て、地主階級より不生産階級への支出の第一段階のみを表示して、支出均衡の場合の五百二十五リーヴルよりも尚、三リーヴル十五ソル少額となることを注意しているが（ibid., p. 88）、この第三年度に於ても、生産階級の不生産階級への支出額を綜括すれば、この両階級の不生産階級への支出総額は一千九十リーヴルとなり、支出均衡の時の一千五十リーヴルより既に四十リーヴル増加することとなる。

第四表　地主・生産両階級の不生産階級への支出額

	支出額	均衡の場合との差	増減率
不生産階級への支出			
支出均衡の場合	1050		
食料の奢侈第一年度	915	−135	13%減
〃　第二年度	998	− 52	5%減
〃　第三年度	1090	＋ 40	3.8%増
〃　第四年度	1189	＋135	13%増

従って「食料の奢侈」第四年度に至っては、ウーグ博士が指摘する如く、不生産階級への各支出額はいずれも、支出均衡の場合よりも多額となり、本稿にて試みたる如く、その総額を算出すれば一千百八十九リーヴルとなりて、支出均衡の場合よりも百三十九リーヴル、即ち約十三パーセント増加することとなる。

ウーグ博士のこの「食料の奢侈」四ヵ年間の処論はケネーやミラボー侯の経済表の紹介としては若干その範囲を超えてはいるが、彼等が主張せんとせるところを簡明に伝えて居り、ケネーの『経済表の分析』の冒頭に掲げられた「農業繁昌すれば、他のあらゆる技術も亦栄ゆ」（Œuvres, p. 305：邦訳、岩波文庫本四五頁、坂田訳本一二六頁）というソクラテスの言葉を経済表を以って数字的に立証せるものである。「農業にとって不利になるようなすべてのことは、国民や国家にとっても有害であり、農業を促進するに寄与するすべてのことは国家・国民にとっても有利である」（Physiocratie, t. I, p. 72, Œuvres, p. 318：邦訳『経済表』岩波文庫本六一—二頁、『全集』第二巻二四七—八頁、坂田訳本一四八頁）となす重農主義経済学派の仏蘭西の重商主義たるコルベエルティシズム政策に対する批判を簡明に経済表を使用して表現したものとして価値あるものである。

五

第四　経済表第二版に於けるケネーの「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」の解釈に就て

ケネーは既に経済表第二版の『経済表の説明』の中に過度の「装飾の奢侈が地主にあって六分ノ一、工匠において六分ノ一、耕作者

において六分ノ一増加するものと仮定すれば、六百リーヴルの収入の再生産は、五百リーヴルに減少するであらうから。その反対に、もし支出の増加が、自国の農産物の消費の側において、または粗生生産物の輸出において、この程度に達したとすれば、六百リーヴルの収入の再生産は七百リーヴルに、かくて累進的に、上昇するであらう。」とし、「斯く不生産的支出または生産的支出の孰れか一方が他方にまさる程度の大小により、収入の年再生産に生じる変化は容易にこれを判断することが可能である。予は敢て云ふ、人々は（経済）表の秩序に生じる変化そのものによって容易に之を判断することが出来ると。」（Tableau Œconomique, p. ii：邦訳、岩波文庫本一九頁、坂田訳本二六頁）と論述しているがその経済表も計算方法も明らかにすることがなかった。従ってこの問題に就ての解釈は諸学者の間に従来必ずしも、一致していないのである。

(一)　バウエルの解釈に就て

この経済表第二版本の発見者であるバウエル Stephan (Etienne) Bauer はこの一節に関して「絹織物又は磁器に対する嗜好が凡べての階級の間に増加して、それ等の消費が前の消費の六分ノ一増額するものと想像せよ。斯くの如き場合、凡べての循環に於て六分ノ一の多額の支出が第三階級（不生産階級）の側に流入して、農夫から納付せられる次年度の地主の所得は六百リーヴルから五百リーヴルに減少する。これを「装飾の奢侈」といふ。次に農産物の需要増加によりて第一階級（生産階級）が前年よりも六分ノ一多額に投資し得ると想像せよ。然らば次年度の地主階級の所得額は六分ノ一多額となるであらう。」（Economic Journal, Vol. V, p. 11：傍点及び括弧内挿入は筆者）と解説している。

(二)　三辺金蔵博士の解釈に就て

吾が国に於ても、三辺博士は論稿『Tableau Economique（経済表）の解説』に於て、ケネーは「各階級の費すところが生産階級の為めに偏するや、不生産階級の為めに偏するや否やに因りて一国の繁栄と衰亡とを容易に判ずるを得可しとなし、其論証を此表に関聯せしめて、例へば前者に偏すること先きの場合よりも六分ノ一ならば中央縦列の総和は七百となり、後者に偏すること同じ割合ならば其総和は五百となると説ける其計算も亦、容易に之を知るを得可し、蓋し此場合に於ては経済表の数字は左の如き変化を見るに至ればなり（但し生産・不生産両階級の者の費す所は前と同じ割合なりと仮定すと知る可し）」（三田学会雑誌第十二巻第十一号一三四頁、論集『経済学説研究』三三五頁）とバウエルと同じ様に解釈して「食料の奢侈」の場合の数字の配列を掲載せられる。但しこの本稿第五表の括弧内の数字と各列の合計額とは筆者の挿入せるものである。尚この解釈によりて「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」との夫々の支出秩序を『農業哲学』の略表の形式にて表式すれば本稿第八図となる。

この二つの場合に於ては、生産階級のものは地主と同額を不生産階級へ、不生産階級のものは又地主と同額を生産階級へ支出することとなるが、地主の生産・不生産両階級への支出の差はいずれの場合も六分ノ一となるが、生産・不生産両階級の相互的支出の差は五分ノ二又は七分ノ二となりて、ケネーの地主と共に「工匠において六分ノ一、耕作者において六分ノ一」増加し、或は減少するとする前提に一致せざることとなる。

これはケネーが「不生産的支出または生産的支出の孰れか一方が他方にまさる程度」六分ノ一とするをバウエルは「前年よりも六分ノ一」又三辺博士は「先きの場合よりも六分ノ一」多額或は少額となるものと解釈せる結果である。

第八図

装飾の奢侈

生産階級 年投資	地主階級 所得	不生産階級 投資
600	600	300
$\{300\times(1-\frac{1}{6})\}$ 250	250	350 $\{300\times(1+\frac{1}{6})\}$
$\{300\times(1-\frac{1}{6})\}$ 250	250	350 $\{300\times(1+\frac{1}{6})\}$
500	500	700

食料の奢侈

生産階級 年投資	地主階級 所得	不生産階級 投資
600	600	300
$\{300\times(1+\frac{1}{6})\}$ 350	350	250 $\{300\times(1-\frac{1}{6})\}$
$\{300\times(1+\frac{1}{6})\}$ 350	350	250 $\{300\times(1-\frac{1}{6})\}$
700	700	500

第五表　「食料の奢侈」の支出

経済表の左（生産階級側）及び中央（地主階級側）	経済表の（右不生産階級側）
$\{300\times(1+\frac{1}{6})\}350$	$250\{300\times(1-\frac{1}{6})\}$
$\{150\times(1+\frac{1}{6})\}175$	$125\{150\times(1-\frac{1}{6})\}$
{75 × (〃)}87−10	62−10{75×(〃)}
{37−10×(〃)}43−15	31−5{37−10×(〃)}
{18−15×(〃)}21−17−6	15−12−6{18−15×(〃)}
{9−7−6×(〃)}10−18−9	7−16−3{9−7−6×(〃)}
{4−13−9×(〃)}5−9−4	3−18−1{4−13−9×(〃)}
{2−6−10×(〃)2−14−8	1−19−0{2−6−10×(〃)}
{1−3−5×(〃)}1−7−4	0−19−6{1−3−5×(〃)}
{0−11−8×(〃)}0−13−8	0−9−9{0−11−8×(〃)}
{0−5−10×(〃)}0−6−10	0−4−10{0−5−10×(〃)}
{0−2−11×(〃)}0−3−5	0−2−5{0−2−11×(〃)}
{0−1−5×(〃)}0−1−8	0−1−2{0−1−5×(〃)}
合計　700	合計　500

第六表

階級	支出額	生産階級へ	不生産階級へ	其の差	支出額に対する比率
地主階級の場合	600	250	350	100	$\frac{1}{6}$
生産階級	500	150	350	200	$\frac{2}{5}$
不生産階級	700	450	250	200	$\frac{2}{7}$
地主階級の場合	600	350	250	100	$\frac{1}{6}$
生産階級	700	450	250	200	$\frac{2}{7}$
不生産階級	500	350	150	200	$\frac{2}{5}$

(三) 山口正太郎博士の解釈に就て

山口博士は論稿『経済表の研究』（大阪商科大学経済研究年報第四号掲載）に於て「最初の地主の支出が不生産階級に $\frac{1}{6}$ だけ多ければ、その事を以て結局、一年の結末に流通の全過程を通じて生産階級に五百リーヴル、不生産階級に七百リーヴルの所得を与ふることとなることを言ってゐるので生産・不生産両階級の支出が孰れに多く傾くや彼（ケネー）は考慮せなかったものと言ふべきであらう」（同年報一一三頁）として、三辺博士が前記但し書に「生産・不生産両階級の者の費す所は前と同じ割合」とあるを相互に二分ノ一ずつを支出する均衡の基本的支出秩序の場合と同じと解し、又次に論ずる柴田 敬博士の云ふ如く「生産・不生産両階級が其支出の都度 $\frac{1}{6}$ づゝ多く工作品に費すと考ふれば生産階級の所得は五百リーヴルより遙か少く地主階級の純収入も之に伴ふて少く、不生産階級の所得は七百リーヴルより遙か多くならざるを得ない」（同年報第四号一一二—三頁）ものと考えられたのである。

三辺博士の生産・不生産両階級の者の支出が「前と同じ割合」とは地主階級の者の費す如く生産階級への支出に偏すること「先きの場合——支出均衡の場合——よりも六分ノ一」ならばということであることは、そこに掲げられた数字の配列によりて明らかである（本稿第五表及び第七表比較参照）。

又山口博士の解せらるる如く地主階級が、「装飾の奢侈」のため、その所得六百リーヴルを、不生産階級に三百五十リーヴル、生産階級へ二百五十リーヴル支出するも、生産・不生産両階級の者は、その受け取り額の二分ノ一ずつを相互に支出するとする時、経済表の数字の配列は次の第七表の如くなりて各縦列の合計額を算出するに「装飾の奢侈」によりて食料として売却せられる農産物の代金総額、即ち当該年度の生産階級の年投資額、従って再生産せらるる純収穫、即ち次年度の地主の所得額は

$$S=\frac{250+175}{1-\frac{1}{4}}=566-13-4$$

第七表　「装飾の奢侈」の支出

経済表の左（生産階級側）及び中央（地主階級側）	経済表の右（不生産階級側）
$(600\times\frac{5}{12})250$	$350(600\times\frac{7}{12})$
$(350\times\frac{1}{2})175$	$125(250\times\frac{1}{2})$
(125×〃)62—10	87—10(175×〃)
(87—10×〃)43—15	31—5(62—10×〃)
(31—5×〃)15—12—6	21—17—6(43—15×〃)
(21—17—6×〃)10—18—9	7—16—3(15—12—6×〃)
(7—16—3×〃)3—18—1	5—9—4(10—18—9×〃)
(5—9—4×〃)2—14—8	1—19—0(3—18—1×〃)
(1—19—0×〃)0—19—6	1—7—4(2—14—8×〃)
(1—7—4×〃)0—13—8	0—9—9(0—19—6×〃)
(0—9—9×〃)0—4—10	0—6—10(0—13—8×〃)
(0—6—10×〃)0—3—5	0—2—5(0—4—10×〃)
(0—2—5×〃)0—1—2	0—1—8(0—3—5×〃)
合計　566—13—4	合計　633—6—8

又売却せられる製作品の総額は

$$S=\frac{350+125}{1-\frac{1}{4}}=633-6-8$$

斯く、地主階級の者のみが「装飾の奢侈」によりて不生産階級へ支出均衡の場合よりも六分ノ一多く支出し、生産・不生産両階級の者は、その受け取る代金を相互に二分ノ一ずつ支出する時は、ケネーの言う地主の所得は五百リーヴルよりも六十六リーヴル十三ソル四ドニエも多くなり、又「食料の奢侈」の場合は七百リーヴルよりも六十六リーヴル十三ソル四ドニエも少ないこととなりて、いずれも、ケネーの結論とは一致せざることとなる。

㈣　柴田敬博士の解釈に就て

柴田博士は論稿「経済表について」（経済論叢第三十一巻第二号掲載）に於て、ケネーが論述する如く地主ばかりでなく、工匠も、耕作者も、生産・不生産両階級への支出の差を六分ノ一として、その計算を行い「装飾の奢侈」の場合「農産物に対する地主及び不生産階級の需要総額——従って経済表の思考方法によれば所得総額は $\frac{71400}{109}$ $\frac{57000}{109}$ であり、工作品に対する地主及び生産階級の需要総額は であると為すべきであったと思はれる」（同誌一二三頁）とせられる。斯く地主のみならず、工匠も、耕作者も、その支出毎に、「装飾の奢侈」の時、生産階級に対してよりも、不生産階級へ六分ノ一ずつ多く支出すると計算しても、山口博士が懸念せられし如くに、地主の所得の再生産は「五百リーヴルより遙か少なく」なることなく、寧ろ五百リーヴルより僅かながら約二十三リーヴル多額となるものであり、又この反対の「食料の奢侈」に在りても「七百リーヴルより遙か多く」なることなく、却って約四十五リーヴル、それより少額となるのである（大阪商科大学経済研究年報第四号一一二—三頁参照）。然しながら尚柴田博士は「此の計算による時はケネーの答とやや変った数になる」（同誌一二六頁註31）ものとして、更に不生産階級の投資が製作品の原料となる農産物購入のために支出さるる過程が経済表（原表）には欠けていることを注意し、この過程を補足せる支出均衡の基本的秩序の第六表と「装飾の奢侈」の第七表（同誌一二五頁）とを掲載するが、この場合、農産物の売却総額は九百リーヴルとなり、その三分ノ二の年投資によりて再生産せらるる純収穫、即ち地主の所得額はいずれも六百リーヴルとなり、従って「地主の支出が生産・不生産何れの階級の生産物により多く傾かうとも、単なる其の事によっては国富は影響されないと言ふ事が推論されたであらう」（同誌一二四頁）とケネーの処論を全面的に否定されたのである。

然しながら、柴田博士は後の著書『理論経済学』下巻の「補遺及び修正」の中に「社会的生産物に対する需要比率に於いて土地生産物に関する需要係数の占める割合が大となれば大となるほど地代総額乃至実質地代総量は大となるが普通である」（同書上巻三五八頁）とし「此の点に於いて顧みるべきはケネーの経済表である」（同書下巻一〇三二頁）とし、その第二版の『説明』に「装飾の奢侈」による工業の製作品に対する需要の増加が農産物需要の減退となり、地代としての地主の所得を減少せしむる結果となる点を指摘せられ「私の注目せんとする問題は此処に存する。何となれば其の点私は嘗て誤って批判してゐたからである。」（同書下巻一〇三五頁）として前記の解説を自ら修正せられた。

斯くして基本的の支出平均の場合に於ける関係を表式する七つの方程式と「装飾の奢侈」の際の変化せる需要比率を示めす三つの方程式からして次の如き答を得たのである。

地主階級の農産物需要額　$P_{11}=208.333$

地主階級の工産物需要額　$P_{12}=291.667$

生産階級の農産物需要額　$P_{21}=208.333$

生産階級の工産物需要額　$P_{22}=291.667$

不生産階級の農産物需要額　$P_{31}=416.667$

不生産階級の工産物需要額　$P_{32}=583.333$

而も純収穫再生産額は農産物再生産総額の二分ノ一に等しく、地主階級の農産物と製作品とに対する需要量に等しいという方程式からして地主階級の農産物と製作品との需要合計額が五百リーヴルとなるから、ここに「装飾の奢侈」の結果、ケネーが地主の所得の再生産額が五百リーヴルとなるとの説は証明せられたものと做すのである（同書下巻一〇三六頁参照）。

この柴田博士の得た数字によれば地主・生産両階級のものは「装飾の奢侈」と言いながら、いずれも支出均衡の場合よりもむしろ製作品への需要が減少しているのである。而も地主階級のものは、所得六百リーヴルを有しながら、農産物を約二百八リーヴル、製作品約二百九十二リーヴル、計五百リーヴルを購入していることとなり、ケネーの述べる如く、本年度所得六百リーヴルを支出した地主の次年度の所得が五百リーヴルに減ずるとなるものではない。いずれにしても、柴田博士が『理論経済学』に修正せられたこの「装飾

の奢侈」の計算方法も、その答も亦承認し得ざるものである。むしろ修正前の地主の所得が「装飾の奢侈」の時、$\frac{57000}{109}$に減少し、「食料の奢侈」の場合、$\frac{71400}{109}$に増加するとなす方が、次に検討するミラボー侯の第三表の計算に一致するものである。

然しながら、更に一歩を進めて、柴田博士は不生産階級の製作品の原料としての農産物の需要をそのまま生産階級への支出とする「装飾の奢侈」の第七表（経済論叢第三十一巻第二号一二五頁）からして、農産物の売却総額を九百リーヴルとし、その三分ノ二の年投資によりて再生産せられる純収穫、従って地主の所得は依然として六百リーヴルとなれば、「装飾の奢侈」の支出という「単なる其の事によっては国富は影響されないと言ふ事が推論された」（同誌一二四頁）ものとして、ケネーの処論を全面的に否定されたのである。

「装飾の奢侈」によりて需要が増加せる製作品の原料としての農産物を購入するための不生産階級の支出が考慮される時、それが全面的には生産階級への支出となるなれば、結局、支出均衡の場合と同じ結果となるのではないかという疑問は一応何人にも持たれるのであるが、過度の「装飾の奢侈」の時、需要せられる工業製品は主として外国製品であり、自国製品としてもその原料は輸入品であった当時の仏蘭西の実情に於て、不生産階級の原料購入の支出をその場合直ちに生産階級への支出とは考える可きではないのである（本稿七八頁参照）。この意味に於て、柴田博士の前記の「装飾の奢侈」の第七表も、又後の「装飾の奢侈」の三つの方程式（『理論経済学』下巻「補遺及び修正」一〇三五頁参照）も、筆者の同意し得ないものである。

六

第五　ケネーの「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」との計算方法とその答に就て

ミラボー侯の『経済表と其解説』は最初経済表第二版のケネーの「経済表の説明」に次いで「経済表の第二の説明」la seconde explication du Tableau économique と題されたものであり（Œuvres, p. 157：邦訳『全集』第一巻二七一頁参照）而も、著者自身、師ケネーの「単に助力をたまわったのみならず、教示をも仰いだのである」（Œuvres, p. 309：邦訳『全集』第二巻二二九頁）ことを明記していることよりしても、吾々はケネーが『経済表の説明』に於ける「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」の結論はミラボー侯がその『解説』の第三の経済表に示めされた支出秩序と同一の計算方法に拠るものと考えるのが至当であろう。

先ず本稿第二図の公式によりて算出するに、その「装飾の奢侈」の場合、aは六百リーヴル、Rは十二分ノ五、rは十二分ノ七であるから、地主・不生産階級へその食料として売却せる農産物の代金をその年投資として生産階級が再生産する純収穫、従って地主階級の所得は

$$S=\frac{aR(1+r)}{1-Rr}=522\frac{102}{109}$$

に減少する。

又「食料の奢侈」の場合は、Rは十二分ノ七、rは十二分ノ五となりて、再生産せらるる純収穫、従って地主階級の所得は

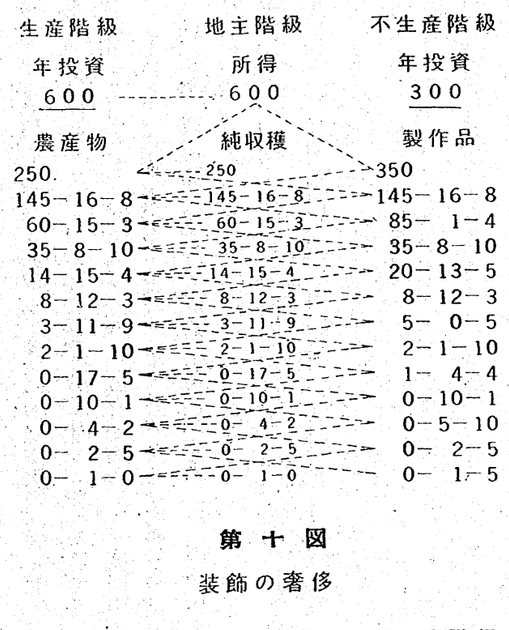
$$S=\frac{aR(1+r)}{1-Rr}=655\frac{5}{109}$$

に増加する。

斯くの如き計算の結果を、ケネーは百リーヴル以下を四捨五入して「装飾の奢侈」の時、再生産せらるる地主の所得は五百リーヴルに減額し、「食料の奢侈」の場合はそれは七百リーヴルに増大するとし、各階級のものの支出が、いずれか一方に六分ノ一傾けば、再生産せられる地主の所得が六分ノ一増減すると簡明に、且つ効果的に記述したものと解せられるのである。但し、その結果から描かれる経済表（原表）の数字の配列は本稿第五表の如く略表は第八図の如くなるものである。

然し、前記のミラボー侯の『解説』の第三の経済表と同一の計算方法にてケネーの『説明』の「装飾の奢侈」の経済表（原表）を掲げれば次の第九図となり、又略表の形式にて「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」の支出秩序を表式すれば次の第十図となる。

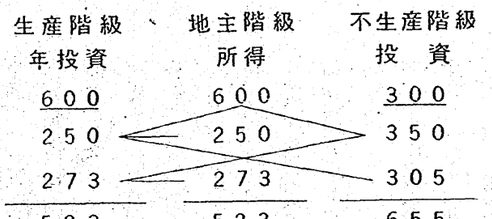
第九図　経済表第二版の「装飾の奢侈」



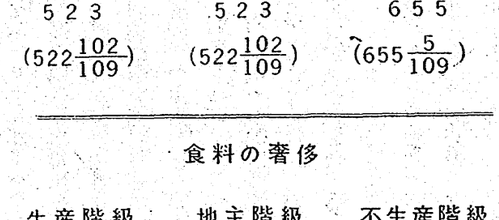
不均衡の経済表に就て

第十図

装飾の奢侈



食料の奢侈



尙ミラボー侯の『経済表と其解説』の第一の経済表の下記の註に算定する地主の所得六百リーヴルを基本とする支出均衡の場合と各支出が左右いずれか一方に六分ノ一傾く「装飾の奢侈」と「食料の奢侈」との支出が、生産階級の投資並びに収益に及ぼす影響を表示すれば次の第八表の如く、投資も収益も支出均衡の際に比して、いずれもその約六分ノ一の増減が見られるのである。

第八表

投資と収益	支出均衡秩序	装飾の奢侈	食料の奢侈	均衡との差額
原投資	二八五〇	二三八〇	三三二〇	四七〇
年投資	六〇〇	五〇〇	七〇〇	一〇〇
投資利子	三四五	二八八	四〇二	五七
年支出 利子 原投資利子	二八五	二三八	三三二	四七
年支出 利子 年投資利子	六〇	五〇	七〇	一〇
年支出	九四五	七八八	一一〇二	一五七
総収益	一五四五	一二八八	一八〇二	二五七
総収益 年支出回収	九四五	七八八	一一〇二	一五七
総収益 純収益	六〇〇	五〇〇	七〇〇	一〇〇

業品は一切買はない」とすれば、ケネーの「表」にては「矢張り所得が農産物と工業品の購入とに折半せられた場合と同様、前年と同額六百リーヴルの純収益が造り出されるのである。これでは農産物に対する支出の増減は毫も純収益を増減せしめないことになり『経済表』自ら『経済表』の主張を打ち消すことになる」（『学窓雑記』一七二頁）ものと考えられた。然しながら、この場合「各階級とも」と言われるが、生産階級への支出は地主階級からの六百リーヴルだけで、「食料の奢侈」でありながら不生産階級に属するものは、その食料としても、自国農産物を全く購入しないという不合理のことなる。

ケネーが各階級のものが、生産・不生産両階級への支出の差をいずれも六分ノ一とせるは、経済表の支出秩序を破らない限度に於て仮定し得る極限を示めしたもので「過度なる」という言葉が附せられた所以であろう。

洵に、基本的の経済表に示めされる如く、各階級のものが、生産・不生産両階級へ均等に支出し得るのは「その国土において、耕作ならびに取引上の自由と便宜とが可能なる最高度の段階に到達し、したがって地主の収入が、もはやそれ以上増加しえない限界に達しているほどの王国の繁栄状態にあっては、地主は収入の半分を、購入のために、不生産階級に支出することができる」のであって、「国土が完全には、耕作も、改良もされていず、道路が不備であり、生産物輸送のために河川を航行し得ず、運河も開鑿せねばならぬやうな場合には、地主は必要な支出によって、能う限りその収入とその享楽とを増すため、不生産階級に対する支出を節約しなければならないであらう。彼等がその目的を達するまでは、不生産階級に対してのその余分の支出は、彼らの富裕と国民の繁栄とを傷う奢侈の支出である」（Œuvres, p. 318-9：邦訳、岩波文庫本六一―二頁『全集』第二巻二四七頁、坂田訳本一四八頁）と看做されたのである。従ってその意味に於ては不生産的支出は支出額の二分ノ一というのが限度と考えられたものと思われる。

次いでウーグ博士は、均衡攪乱の第一類の誘因即ち全面的に経済循環の上に生ずる誘因の第二として、農産物の価格の下落、農産物取引に直接課せられる税金等、其の他凡ゆる原因による農耕者の損失によりて、その年投資の純収益率が二十パーセントに過ぎない、仏蘭西当時の農業の実情に於ては、年々地主階級の地主一戸平均の純所得額はその農業再建後の五分ノ一即ち百二十リーヴルに過ぎないとするミラボー侯『解説』の第五の経済表を掲げて説明している（ibid., p. 91）。

又、不均衡の第二類の誘因即ち農業生産面に生ずる誘因の第一として、先ずその年投資が年々五十リーヴル即ちその二十一分ノ一ずつ奪わるる場合、農産物再生産額は二千五百七十七リーヴルと、百二十八リーヴル減少することをミラボー侯『解説』の第四の経済表を掲げずして計算のみにて説明し、最後に当時の仏蘭西に於ける過重の租税二億は、それに要する二億の徴税費を含めて地主階級一戸平均の所得八百リーヴルを基本とするミラボー侯『解説』の第六の経済表を掲げて説明している（ibid., pp. 96-7）。

斯くて「均衡の経済表」が重農主義経済学派の理想とする神の「自然的秩序」ordre naturel であるならば「不均衡の経済表」は現実の「人為的秩序」ordre positif であり、従ってウーグ博士は斯くの如き「不均衡の経済表」の検討は「自然的秩序」に固有な理想的性格から「経済表」を解放し、重農主義経済学派の理論に与えられた純粋経済学の歴史に於ける最初の学派たる地位を正当化するものであると結論している（ibid., p. 99）。

又、久保田明光博士も経済表の均衡体系攪乱の原因並びにその過程の検討により、「ケネーの経済表には強い実践的動機がひそみ、且つ経済表そのものが当時のさし迫った政策的課題に対して、単純だが然し明確な一つの理論的解答を与えたものであるといふことは忘れてはならない」（『ケネー研究』一五三頁）ことを注意せられ、又「均衡の経済表」が静学的であるに対してその「均衡体系のくずれに関する論究は正にダイナミックな理論と見ざるを得ないものであって、それはサミュエルソン P. A. Samuelson 教授の所謂「動学的・因果的」dynamic and causal なシステムということができる」（『ケネー研究』一七六頁）ものとせられたのである。